

2015.2.22 四旬節第一主日

## 誘惑を受ける

マルコによる福音 1:12-15

(そのとき、) “霊”はイエスを荒れ野に送り出した。イエスは四十日間そこにとどまり、サタンから誘惑を受けられた。その間、野獣と一緒におられたが、天使たちが仕えていた。

ヨハネが捕らえられた後、イエスはガリラヤへ行き、神の福音を宣べ伝えて、「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」と言われた。

### 説教

四旬節は先週の灰の水曜日からはじまりました。教会のこよみは正月始まりではなく降誕節始まりです。アドベントを四週間過ごすことから始まり (だいたい12月始まりになる) クリスマスが終わると、その次が四旬節 (40日間) となり、そしてイースター (主の復活) を祝い、復活節 (50日間) と続きペンテコステ (聖霊降誕日) となります。誕生 (クリスマス) 復活 (イースター) 聖霊降誕 (ペンテコステ) のこの三つの大きな記念日が教会のこよみの節目となります。例年、四旬節の最初の主日ではイエスの誘惑物語を朗読します。

イエスはヨルダン川でヨハネからバプテスマをお受けになった時、聖霊を受けて「主の僕」としての使命を果たすべく召され、同時に神の子として神の直接の啓示 (あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者 マルコ 1:11) と交わりに与られたのですが、その出来事とイエスが公に宣教活動を始められるまでの間にどのようなことがあったのか、マルコはわずか二節の短い記述で伝えています。しかも、様々な解釈を許す謎めいた表現となっています。

**それから、“霊”はイエスを荒れ野に送り出した。イエスは四十日間そこにとどまり、サタンから誘惑を受けられた。その間、野獣と一緒におられたが、天使たちが仕えていた。1:12-13**

この謎をとくためには、聖書独特の用語の理解が必要です。「荒れ野」「四十日」「サタン」「野獣」「天使」これらはみな聖書特有の意味内容をもっています。創世記に登場する、初めの人アダムとの対比でこのマルコの12、13節を読み解いていきましょう。

### ＜荒れ野＞

霊は神との交わりの現実に導き入れるために、霊を受けた者をあらゆる人間的交わりから追い出して、人里離れた荒野に連れて行くことがあります。

(荒野はイメージしづらいので、わたしは山とか森をイメージしています、霊峰○○山とか神秘の森などをイメージしています)

イエスはどこかの荒野に置かれてしまった。霊の抵抗しがたい力におされて入って行かれたのでしょう。それは、一切の人間関係から追い出されて、直接霊なる神と対面し、神から語りかけられ、神との交わりの中におられたという霊的現実を指し示しています。聖書において「荒野」は預言者がそこから来る場所であり、メシアもそこから来ます。先駆者である洗礼者ヨハネは荒野に現れて「来るべき者」のために道備えをしたのでした。

### ＜四十日＞

その荒野にイエスは「四十日間」いました。「四十」は苦難と試練の時をさす象徴的数字です。大洪水は四十日四十夜続き、エジプトを脱出したイスラエルの民は四十年荒野をさまよい、モーセは四十日シナイ山で断食しました。エリヤは四十日間荒野を渡ってホレブ山につきました。

### ＜サタン＞

神との関わりが現実的でないところでは、サタンも現実的な問題になりません。神との関わりがリアルになると、それを妨げる敵対者＝サタンの力も現実的になってくるのです。

### ＜野獣＞

そのサタンとの戦いにイエスが勝利されたことを、マルコ福音書は「野獣と一緒におられたが、天使たちが仕えていた」という一文で語っています。

「野獣と一緒に」とは、いつも野獣の襲撃の危険にさらされているという意味ではありません。聖書においては、人が獣と一緒にいるのは終末的平和の象徴です。もともと、アダムはパラダイスにおいてすべての獣に名を与え、共にいたのです。アダムは背神の罪のために地が呪われるようになってからは、人はごくわずかの手懐けた獣の他は共にいることができなくなり、獣の襲撃を恐れなければならない者になってしまいました。しかし、終わりの時に、神が地に救いの業を成し遂げ、人の罪がぬぐいさられる時、すべての平和が実現し、人は獣と共にいることができるようになります。その終末的平和の光景を預言者イザヤはこう語っています。

**狼は小羊と共に宿り／豹は子山羊と共に伏す。子牛は若獅子と共に育ち／小さい子供がそれらを導く。牛も熊も共に草をはみ／その子らは共に伏し／獅子も牛もひとしく干し草を食らう。乳飲み子は毒蛇の穴に戯れ／幼子は蝮の巣に手を入れる。イザヤ 1:6-8**

福音書が「獣が共にいた」というのは、この預言がイエスにおいて成就したことを語っているのでしょう。

### <天使>

「天使たちが仕えていた」ここで「仕える」と訳されている動詞は、正確には「食事に仕える、給仕する」という意味です。ユダヤ教の聖書解釈によれば、アダムはパラダイスにおいて天使たちの食物によって生活したとされています。マルコは触れていませんが、マタイやルカの福音書によるとイエスは荒野での四十日の間、断食されました。サタンとの激しい戦いに勝たれたイエスに、天使たちが食物を備えて仕えたのです。

神の似姿としてまっただき良き者として創造された人間アダムはサタンの誘惑に負けて神に背き、すべての人間を罪と死の支配に引き入れてしまいました。これに比してイエスは霊の力によってサタンとの決戦に勝利し、信じる人すべてを罪と死からの解放へと招いてくださいます。

それから、“霊”はイエスを荒れ野に送り出した。イエスは四十日間そこにとどまり、サタンから誘惑を受けられた。その間、野獣と一緒におられたが、天使たちが仕えていた。

**1:12-13**

マルコはこのイエスこそ「終わりのアダム」すなわち終わりの日に創造される新しい人類の頭たるべき方であるとの一文で表現したのではないだろうか。

---